

# あのときの侍



柳瀬川ひろし

あの坂道を登り切るとゴールだ。

時計はまだ3時間53分を表示している。ここから歩いたとしても4時間を切ることは間違いない。

ついにやったのだ。この大会に挑戦し始めて4年目。やっと念願だったサブフォー達成。

いつもはこの最後の登り坂が、すでに記録達成の可能性がなくなった走りを気楽な気分させてくれるのだが、今日は違っていた。

体が疲れを感じていない。沿道の声援を送ってくれる見知らぬ人々一人ひとりにお礼を言いたくなった。

ぼくはゴールが近づくにつれて、その中に彼の姿を探していた。

折り返し地点で見失った彼が、先にゴールして参加者に声援を送っているのではないかと。

しかし、大きな着ぐるみの侍や、袴姿のランナーはいるのだが、彼の姿は発見できない。

そうこうしているうちに、僕はゼッケンナンバーと氏名をコールされて、ゴールテープを切った。そのままゴールしたランナーの流れに吸収されスポーツドリンクを受け取った僕は、芝生に腰を下ろした。

かつては1メートルを超す雪が降り積もることも珍しくなかったという山間の町を幕末の志士たちは決意一つで超えて行った。あの坂本某もその中の一人だった。自らの記録更新の喜びを噛み締めながら、僕はあの仮装ランナーや幕末の志士たちに思いを馳せていた。

ふくらはぎがパンパンになってしまう前に、僕の心は挫けようとしていた。

まだ20キロ地点をも通過していない。腕時計に目をやるとすでに1時間30分を表示していた。

前方に見えるコーナーを右に曲がれば、やっと杉木立の急な登りに入る。ちょうどたくさんランナーが僕を追い越して行った後なので、束の間の一人旅となったようだ。

きつい登りになったが、まだあきらめてはいなかった。何度も時計に目をやり時間の確認をする。あの折り返し地点に2時間でたどり着けたなら、望みはある。問題は旧道だ。アスファルトの道から外れて1キロ弱は木の根が所々に顔を出している山道だ。おまけに走ることもできないほどの急傾斜の登りも待っている。

旧道の1キロはどうしても10分近くかかってしまう。とするとここからの距離は3キロ強だから・・・。

「なにしゆうぜよ」

いきなり後ろから声をかけられて飛び上るほど驚いたが、疲れていて振り向く気力もない。

「ペースの確認です。足がきつくなってきたんで」

「手首につけちゅうのは、なんぜよ」

いったい何を言ってるんだこの人は。音もなく後をついて来るランナーのふざけた問に少しムカッとしながら、抜かれまいと力が入った。

「さっきから見よったら、おまん、手首を見ちゃあ、天を仰ぎ、天を仰いで手首を見ようけど、体の調子でも悪いがかえ」

やれやれと思い、視線を落とすと草履が目に入った。「草履で走ってきたのか」と僕は一気に尊敬の念を抱いてしまった。

仮装ランナーの多い昨今だが、看護師、女学生、コスプレ等、どんな衣装であれジョギングシューズだけは外せない。ランナーの命だ。

と言っても、高下駄や革靴で走るランナーは時々見かけはする。しかし、草履ははじめてだ。こんなクッション性のない履物で走ろうなんて無茶だ。20キロが近づくここまで走ってきたことだけでも、僕は尊敬する。

「ペースを確認していたのです。ちょっとスピードが落ちてきたので」

その仮装ランナーはさらに迫ってきた。袴の裾がひらひらするのが分かる。かなりの長身だ。左の腰には刀を差している。

やれやれ、こんながつつり仮装したランナーに追いつかれたのかと情けなくなった。

「ペースちゅうんは、メリケンから来たもんかえ」

完全なりきり仮装ランナーだ。ばかばかしくなり気にせずに会話を楽しむことにした。

「折り返しまで2時間で行きたいのです。」

「折り返しちゅうんはどこぜよ」

「峠です。そこから先は愛媛県です」

「エヒメケンとは箸拳みたいなもんかえ」

話を合わせろということかと推測した僕は、「いいえ、伊予の国、いや大洲藩かな」と話を合わせてみた。

「まっこと、おまんも脱藩するがか」

仮装ランナーは親しげに隣に並んできた。背は高い。頭はどんなアイテムで仮装しているのかとちらっと見たが、結局じっくり見てしまった。自毛だったのだ。どう見ても自毛で鬘を結っている。完璧だ。これこそリアル仮装脱藩志士ランナーだ。

「ぼくは折り返したら、また、スタートじゃなくて出発地点に戻ります」

「なんじゃ、下検分か。下検分してから脱藩したちゅうやつは聴いたことがないのう」

会話を楽しんでいるうち、左手に旧道に折れる分かれ道が見えてきた。いよいよ最大

の難所だ。

---

「まだ陽は高いき、あわてんでもええ」

言い終わるや、彼は旧道の下り坂を駆け下りていった。

僕は遅れてなるものかと、すぐさま追いかけた。追いかける力が残っていたことに驚いた。時計は見ていなかった。ただ彼だけを見ていた。

彼は袴の裾を翻しながらまるで翔ぶように走っていた。後姿を見ているだけで走るのが楽しくてたまらないことが伝わってきた。

下り坂も底になった辺りで彼は立ち止ると左手の小さな沢から水を掬い、旨そうに飲んだ。やっと追いついた僕は絞り出すように訊いた。

「なんでそんなに元気なんですか」

僕の問いに笑顔で答えると、もう一杯水を飲み、彼は地獄の登り坂を駆け上がって行った。僕は遅れてなるものかについて行った。前傾姿勢で50メートルほども走っただろうか。視線の先にある僕の足が止まりそうになった。そこへ頭上から声が降って来た。

「一刻も早く脱藩したいがよ。大洲には旨い飯を食わせるところがあるでござるよ」  
彼は坂の上から僕を見下ろしそう言った。

「とにかく土佐藩以外の空気を早く吸いたい。今それをせんかったら悔いを残すことになる。わし、いや、拙者はそう思うちよる」

僕は4時間を切るか切らないかにこだわり、走ることを楽しむこともできずいじいじとしていた自分が恥ずかしくなった。「もっと大きいことを考えや」と言われた気がした。

時計を見るとまだ2時間までには15分あった。

「行きましょう」

僕は自分から走り出し、仮装ランナーに追いついた。その勢いで先に立って走った。ものすごい前傾姿勢、おまけにスピードスケートの選手のように腕を振った。荒い呼吸音が木々の葉を揺らし続けた。後ろから軽やかについて来る彼の気配がした。それは、僕に、迷いのない爽やかな人生の縮図を見るような高揚感をもたらした。

どのくらい走っただろう。突然、「お疲れ様でえす」という声に、驚いて顔を上げた。アスファルトの道に戻っていた。地獄の旧道を走り切ったのだ。残すところ、あと800mか。

「おまん、ほんまに脱藩せんがかえ」

「はい。今日はおかげさまで予定より早く峠に着きそうです。記録更新を目指して戻ります」

「そうかえ。一緒に大洲まで行って、飯でも食おう思うちょっとにのう」

「あなたは、そのあとどこに行くのですか」



「長州じゃ。ちょっと寄っておおてみたい人がおるがよ。四国を出る時は船に乗るがが楽しみぜよ。船はまっこと夢があるきねや。小さい船もええけど、わしは大きい異国船のようなやつに乗ってみたい。乗せてもらうがじゃないぜよ。自分で操るがぜよ。ほんでメリケンにも行ってみたいと思うちよる」

たかが田舎のマラソン大会を盛り上げるために、これだけなり切った仮装ランナーを手配できる主催者に脱帽だ。

僕はこの仮装ランナーが、ただ仮装して大会を楽しむ参加者ではないと断定していた。そのことは僕という参加者に寄り添い、ここまでやる気を引き出してくれたことで証明されていた。

僕は意を決して声をかけた。

「坂本さん、この国を頼みますよ」

「おう。この国は変わらんといかん。わし、いや、拙者は江戸に行ってきたよう分かった。けど、土佐におってもわしらあの考えは殿様には伝わらん。そもそもわしらあはお城に上られる身分じゃないき。じゃったら外へ出て己の考え一つで世の中を渡ってみたい。わしは日本の坂本じゃあ言うてのう」

やはり坂本龍馬に仮装したランナーだった。

僕は何だか一緒に大洲まで行ってもいいような変な気持ちになってきた。

「もうすぐ脱藩ですよ。そこの給水所の先が脱藩ラインです」

係の人の声に促されて前方を見ると、すでに到着していたランナーたちで賑わう給水所が目に入った。

急に冷たい水が飲みたくなり給水所に急ぐと時計を見た。まだ2時間までには3分あった。「記録更新できるかも」とうきうきしながら僕は脱藩ラインに立った。

「いよいよ脱藩ですね」

仮装ランナーに話しかけたが返事はなかった。あれっと思い振り返ったが見当たらない。視線を泳がせてあちらこちら探してみたが、見付けられない。

給水所の係員に尋ねてみた。

「坂本龍馬に仮装したランナーを見ませんでしたか。草履ばきで、刀も差していましたが」

しかし、そういう参加者は見かけなかったという返事が返って来るばかりだった。もうすぐ脱藩ですよと教えてくれた係員にも訊いてみた。彼女は僕のことを覚えていた。しかし、僕は一人で走ってきたそう。

時計は1時間59分を回っていた。

僕は折り返す決心をして大洲の町を振り返った。その時突然の風が土埃を舞い上げて



県境を超えて行った。

心の中で何かがはじけた。

「わしは行くぜよ」

それは僕自身の声と重なり、僕の手足を動かし始めた。